

本賞

日本人とは何か 心の機微を映す時代劇

源 孝志 河合 祥一郎

テレビドラマ番組本賞受賞作品『ドラマスペシャル 遺恨あり 明治十三年 最後の仇討』(テレビ朝日)は、最後の仇討ちの実話を基に、秋月藩執政臼井亘理の息子、臼井六郎が起こした仇討ち事件を描いた作品。両親を惨殺され仇討ちを誓う臼井六郎(藤原竜也)は、剣豪・山岡鉄舟(北大路欣也)の下で剣の修行を重ね、また臼井家の下女であった なか(松下奈緒)の支えを受け、十三年の艱難辛苦の末に仇敵・一瀬直久(小澤征悦)を討つのだが、法治国家へと変わりゆく時代のなかで、「武士の美德」とされた仇討ちは、「殺人という犯罪」とされてしまう。この事件の裁判を受け持つ判事・中江正嗣(吉岡秀隆)は、「法の理想」と「武士の心」との間で葛藤した末に、「土族たるにつき」という言葉で武士の誇りを斟酌し、死罪ではなく終身刑という判決を下す。後の大日本帝国憲法公布に伴い、六郎は恩赦で出獄。武士を捨て、生きることになる。作品は、明治維新の価値観、倫理観を背景に、六郎の決して揺るがない仇討ちの決心とその覚悟を描くだけでなく、生きる意味や日本人が忘れかけているものは何かを問いかけていく。

テレビドラマ番組審査員の河合祥一郎さんが、脚本と演出を手がけた源孝志さんに話を聞いた。



河合 この作品は、日本がちょうど法治国家にかわる時に実際に起こった仇討ち事件を題材にしていますが、復讐の是非は、シェイクスピアのハムレットでも描かれているように、古来から人間一般にある問題です。罪を法で裁く現代でも、犯人が憎いといった遺族の心情があって、特に日本人は、赤穂浪士の討ち入りや曾我兄弟の仇討ちなど、敵討ちには思い入れの強い民族だと思っんですね。そういった日本人の心情と、法で裁かなければならなくなった近代日本の状況をからめて、見事にドラマ化されたと思いました。

源 ありがとうございます。

六郎という人物像を際立たせる

河合 吉村昭さんの著書「敵討」を原案になさっていますが、脚本は、後藤法子さんとおふたりでお書きになったんですか？

源 もともと僕が書いたプロットがあったのですが、テレビ朝日でドラマ化が決まった際、別の仕事で日本を長く留守にすることになり、個人的に一番信頼できて相性もいい脚本家の後藤君に第一稿を書いてもらったんです。彼女は時代劇を書く

のは初めてでしたので、時代劇マニアの僕の修正を加えつつ、二人で何度かやり取りをして完成させていった感じです。

河合 原作に忠実に描いていらっしゃると思うのですが、原案にはない下女の“なか”という登場人物をおつくりになっていますね。

源 臼井家で下働きをしていた“なか”という少女は、実在の人物で事件の目撃者でもあるのですが、彼女をプロットの段階でより膨らませたんです。臼井六郎は、仇討ちを成し遂げ、最後に武士を捨てるのですが、フィクションとしてなんらかのカタルシスや希望が必要でしたからね。六郎をひそかに慕い、支える存在として“なか”というキャラクターがぴったりだったんです。後藤君が説得力のある人物像にアレンジしてくれて、松下奈緒さんが奇をてらわない演技で血を通わせてくれました。

河合 原案にない六郎の台詞で、「武士の美德など関係ありません。私はただ人の子として、殺された親の復讐を果たしたいと思っただけです。許されようなど思ってもいない。」とあります。胸に染み入る台詞でした。この台詞によって、武士であ

源 孝志 さん（みなもと・たかし）

演出家 脚本家



CM制作を経てTV制作の世界へ。ドキュメンタリー等のプロデューサー・ディレクター、ドラマの脚本・演出家として活動。主なドキュメンタリー作品に『世紀を刻んだ歌 ヘイ・ジュード』（NHK）第27回放送文化基金賞テレビエンターテインメント番組本賞/ATP賞 個人賞、『ニューヨーク大停電の夜に』（NHK）ATP賞ドキュメンタリー部門 優秀賞、主なテレビドラマ作品に『マイリトルシェフ』（TBS）ATP賞ドラマ部門 優秀賞、『チルドレン』（WOWOW）第33回放送文化基金賞テレビドラマ番組 番組賞など、その他、複数の作品で賞を受賞。また、主な劇場公開映画に『東京タワー』『大停電の夜に』などがある。主な著作物は『星をつかむ料理人』（新潮社）、「グレース」（文芸社）など。

河合 祥一郎 さん（かわい・しょういちろう）

テレビドラマ番組審査委員



テレビドラマ番組審査委員。東京大学大学院教授。専門はイギリス演劇、英文学、表象文化論。著書に『ハムレットは太っていた!』（白水社、サントリー学芸賞受賞）など。

る前に、ひとりの人間として許せないという感情が、とても強調されていたと思います。

源

鎌倉以来700年の長きに亘って「武士の美德」とされてきた仇討ちが、西洋的な近代法治国家に変わることによって、「殺人罪」になってしまうわけですね。世論では、仇討ちは「名誉の仇討ち」なのか「殺人という罪」なのかが論争になるのですが、六郎の復讐心は非常にシンプルで強い。激しく動く時代の中で、復讐への執着を捨てられなかった青年の、真直ぐさと悲しさを描きたかったんです。

六郎が親の敵討ちを成し遂げる前に、敵である一瀬の家族と接触を持ちますよね。時代劇では往々にしてある場面で、普通はそこで葛藤があり心が揺らぐものなんですね。でも六郎はなんの躊躇もなく一瀬を追い求めるんです。第一稿では六郎が独り苦悩するシーンがあったのですが、迷わずカットしました。そのほうが復讐にとらわれた六郎という人物の軸がぶれない。妥協性のない、みじも揺るがない冷徹な怒りを強調したかったんです。

山岡鉄舟が秘める心情

河合

北大路欣也さん演ずる江戸屈指の剣豪・山岡鉄舟が、六郎に剣の稽古をつける場面での、北大路さんと竜也君の立ち回りは非常に見ごたえがありました。

源

北大路さんは自他ともに認める時代劇のスターで、殺陣や剣の扱いに習熟されているとはいえ、68歳という御年ですし、深夜に及ぶ撮影は自重してくれとプロデューサーから釘を刺さ

れていたんですが、東映京都撮影所にある道場での稽古の時、僕が予想したよりもはるかに速い北大路さんの太刀行きや身のこなしを見せられ、こっちも俄然、燃えちゃったわけです（笑）。

北大路さんは、ご自分の映らない撮影の間も、あまり楽屋にお帰りにならないんですよ。他のカットを撮る間もじっと座って待っていらっしゃって、そうすると、現場には表現し難い緊張感がでてくるわけです。たぶんそれは、ご自分の役へのモチベーションの高さを、小澤征悦君や藤原竜也君ら後輩の俳優陣に、身を持って示しているところもあったんだと思います。

河合

山岡鉄舟という人物は原作にはそれほど出てきませんが、膨らませて丁寧に描いていらっしゃいます。

源

白井六郎という男が山岡鉄舟の門弟になっていたという事実だけで、想像力が膨らみますよね。山岡は剣一筋に生きた旧幕臣の大家で、「最後の武士」と言われている剣豪です。そういう人物のところへ六郎がたまたま転がり込んでいること自体にドラマがある。

河合

六郎の仇討ちの意思を知りながらも止められない山岡の心情を描いた場面も見事だなと思いました。

源

六郎は、幼い時に父親を殺され、やはりどこかで厳しい父性のようなものに餓えていたのではないかなと思います。山岡鉄舟という人間にそれを見出してもおかしくない。ドラマでは描いていませんが、山岡には実際に一男一女がいたそうです。

でも剣の才能に恵まれたのはむしろ長女の松子さんの方で、息子は剣を嫌い後継者にはならなかった。剣に生きた山岡としては忸怩たる思いがあったはず。そんな山岡が、荒削りだけど剣の才能のある臼井六郎という青年と出会ったらどう感じるでしょう？ しかもこの若者には破綻の匂いがして放っておけない。もし自分にこういう息子がいたらと仮託する… 裏の設定として、そういうつもりで芝居をして欲しいと北大路さんと竜也君にはお願いしました。ですから、仇討ちの旅にでる六郎に、山岡が苦いものを飲んだような顔をして、「行け」と言う。息子を失う悲痛な父親の顔です。六郎が去ったあとの北大路さんの表情は、台詞がなくてもそういう思いを如実に表現しています。

舞台で身につけた所作で映像に挑戦

河合 主役のキャスティングは最初から藤原竜也君とお考えになっていたのですか？ 臼井六郎の写真を見ると、驚くほど竜也君に似ているんですね。

源 似てますよね。だからというわけではないのですが、僕の思い込みで六郎役は藤原竜也君と決めていました。プロットは当て書きです。彼は時代劇の基本的な所作を舞台の上で完全に身につけているので、270年間の江戸時代が作り上げた武士階級の美しい立ち居振る舞いが、何のストレスもなくできる。廊下の向こうから、すっと来て片膝をつき「臼井、参りました」と、障子を見事に開けて座敷に入り、畳の縁を踏まずにすばっと座る、この何気ない動作一つとっても、彼の場合水際立っている。頭で理解しているのではなくて、舞台の上で鍛えられた立ち居振る舞いが体に染みついてるんですよ。そこがまたサムライっぽい。

河合 舞台『ムサシ』でも、普通の役者が絶対にできないことでも、竜也君だと自然にできていましたからね。

源 六郎が、最初に一瀬を討とうと試みて、恐怖で動けなかった場面がありますよね。岩陰に隠れて、着物の袖をまとめるのに紐をたすきがけにするのですが、僕が小道具さんに普通のたすきを用意してもらおうとしたんですね。そうしたら、刀には下緒さげというのがついていまして、帯から抜け落ちないように刀をつなぎとめている紐のことですが、竜也君が「監督、刀の下緒じゃダメですか？」って言ってきたんです。「おお、マニアックだな(笑)、それはかっこいい」と思って、あそこは、下緒で

袖をまとめるんですね。しかも下緒を口でくわえて逆手で掛けるのですが、彼は一回練習しただけで、できてしまうんですよ。素晴らしいですよ。

河合 竜也君は、これまで演劇の賞は受賞していますが、映像の世界では、この六郎役で勝負したところがあったと思います。

源 今まで彼の舞台を見てきて、映像にその良さが生かされていないのではと思っていました。ですから演劇で身に付けたスキルや感性、全てを映像で出すべきだ、新しいことをしなくていいから、今までの貯金をこの作品で全部出さないと言ったんです。それが彼の他にはない「個性」ですから。

日本人が持つ心の機微

河合 六郎が一瀬を追って江戸に行く時に、下女の“なか”に「待っていてくれ」と言いますよね。“なか”はその一言を支えに後の十何年を生きていくわけですが、人を信じ、誠実に約束を守るその繊細な感覚は、古くからの日本人が持つ心の機微だと思うんですよ。

源 僕らが子どもの頃は、時代劇が映画でもテレビでもたくさん作られていて、そこから昔の人間同士の関わり方や、日本人が持っていたメンタリティーなどを自然に勉強できたのですが、今は少なくなりましたよね。今や時代劇も現代の感覚で描かれていたりしますし、ですから、この作品では日本人は何を考え、何を良しとしてどういうことを苦しいと思うのか、そういう日本人の心の機微を描きたかったんです。この作品を見た若い人の心にも留まるものがあればいいですね。

河合 日本人とはどういうものか、答えようとしてもなかなか答えが見つからない問題として、我々が問い続けていくのだと思うのですが、その原点を知らしめてくれる作品だったと思います。心動かされるものがありました。

最後に、今後の予定を教えてください。

源 現在進めているテレビと映画の企画があります。1970年代と1980年代の話で、これも日本人を知る作品になると思います。また、『遺恨あり』が、2013年に舞台になる予定で、僕が脚本を書きます。この撮影を通して新しいアイデアも生まれたので、テレビドラマとは違ったものにしたいですね。

河合 それは楽しみです。ぜひ、今後ともご活躍ください。今日はありがとうございました。